

沖

1
2016

俳句雑誌【お志】



空 想

能村 研三

ボルテージ

空 想 の 奥 へ 奥 へ と 大 根 干 す
霜 照 り の 木 道 渡 る き び す 締 め

朴 の 葉 の 意 気 横 溢 と 散 り に け り
か つ か つ と 蕎 麦 白 を 碾 く 十 二 月

昨秋の「沖」の創刊四十五周年記念大会から二か月余りが経ったが、まだその興奮と余韻が残っている。「沖」人の総力を結集して行われた会で、良い会ができたと思っっている。六十五歳になったのを機に俳句一本の生活になったが、一昨年の暮に「自註句集」をまとめたのを皮切りに、昨年六月に句集『催花の雷』を、そしてこの勢いを借りて十月には初めての随筆集『飛鷹抄』を刊行した。一年に三冊の本を刊行したことは、未だかつて無いことである。現在もまだ私自身のボルテージが上がっている状態なので、今しばらくこの状態を維持しながら本年も頑張っていきたいと思っっている。

また昨年からは俳人協会の理事に就任したことにより、協会の全国大会や俳句大賞の予選、本選の選句、地方大会での講演などが続いた。本年は担当理事の仕事として四月に府中で行われる「花と緑の吟行会」は四百人位の方が集まる会なので、その運営に当っては、沖の総力をもつ

返信は目隠しシール北塞ぐ

数へ日の二重約束又さうらふ

長崎・近代化遺産三句

屹立の廃墟の島や初しぐれ

浮沈艦軍艦島の夕しぐれ

牡蠣殻の白きを敷きし船渠跡

飯塚・嘉穂劇場

神無月奈落に潜む小屋仕掛

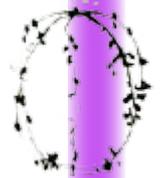
て臨まなければならぬ。

さらには、千葉俳句作家協会と市川市芸術文化団体協議会のそれぞれ会長に就任したことも多忙を極めることになった。年代的にも、こういう役職が回ってくる時なのかとも思い、それぞれの会の発展に微力ながら力を注ぎたいと思つてゐる。

本年から新しく、ある新聞社の四県分の俳句欄の選句を月二回行うこととなったことも大きな仕事である。「沖」の東北、関東、中部、九州のブロック大会に加えて、昨年は殆どの支部の指導句会にお邪魔した。これまでは、私が公務で時間がとれなかつたので、幹部同人にお願いしていたものが、全て私が行くことになったもので、普段投句を頂いている方お一人お一人のお顔を拝見して話が出来ることが大変嬉しいことである。今年も引き続き各支部への指導句会へお邪魔したい。

今年先師登四郎から主宰を継承して十五年目の年にあたる。先師もちょうど私と同じ年齢の頃には東奔西走の毎日で、その中で俳句の新しさをめざして句作に励んでいた。

蒼茫集



深 轍 森岡 正作

秋声か先師のこゑか谷沖燦
雨男晴れ女ゐて初時雨
立冬の雀を降らす竹百幹
深轍冬田に父のゐるやうな
寒の水幾度切つて刃を鍛ふ
播粉木の練つて捏ねつて雪来るか

暮れのこる 辻美奈子

卓袱台は冬日の暮れのこるところ
本積んでくづれて短日とおもふ
からすうり笑ひすぎたる後の黙
小さき鬼ゐるらし木の実落ち継げり

聖夜劇この名をのこかをみなごか
手と呼んで猫の前足冬ぬくし

風の韻 吉田政江

登四郎先生みんな来ました石路日和
木枯一過登四郎晴とはなつかしき
鳥渡る元号四たび耐へし杉
穂穂の田面をゆらす風の韻
逆転の一打を運ぶ神渡し
二の酉や福のおこぼれ手締め音

風の依代 千田百里

先師碑は風の依代よりしろ秋惜しむ
谷中吟行三句

秋蚊ふはふは一茶碑に来てあそぶ
小鳥来る樹の許村上さん眠る
流星やかかの荒海も力抜き
喜寿といふ色なき風の如きもの
バーボンとレノンが好きで十二月

雄 杉 千 田 敬

色変へぬ松や沖見ゆ富士も見ゆ
秋うらら雄杉の許師は在す
師を訪へば碑面の照り秋澄めり
ひと区切り今日は日曜冬立つ日
冬日射し老の部屋です隅までも

村上護氏の墓碑訪ひて

雄渾の碑文字その人身に沁みて

冬 麗 林 昭太郎

屋根石の屋根にやすらふ良夜かな
菊日和宅配便の二回くる
あかんばを秤に乗せる菊日和
サスペンス佳境の釣瓶落しかな

噴煙の影ふとこゝろに山眠る
冬麗のここが真ん中乳母車

能 面 宮内とし子

能面の声なき笑ひ冬に入る
野分くる弁財天は琵琶を抱き
ハロウインの南瓜置かるる駐在所
水なだめ水を均して紙を漉く
無住寺の日暮れは綿虫色となる
一枚に音の生まるる朴落葉

鯨 日和 河 口 仁 志

曼珠沙華散つてしまへばみんな夢
生き恥はさらりと捨てて蛇穴に
表札に嫁の名加へ文化の日
浅間見ゆ小諸の里の掛大根
悠然と日の座月の座山眠る
釣れてよし釣れずとも良し鯨日和

水柄杓 田所節子

等圧線がらんと紅葉狩日和
靴裏にぴしつと弾けて櫛の実
星飛んで宇宙から声届きけり
師の墓に秋陽を注ぐ水柄杓
田の神の掛けたるりぼん曼珠沙華
草笛を秋思の音色と思ひけり

冬 用意 菅谷たけし

さんま船吃水深く戻りけり
村口に今も川あり文化の日
満開に青空透ける冬桜
リビングの模様替また冬用意
夕映えや冬耕人の影絵めく
朴落葉われに思はぬ仰臥の日

大きな檻 成宮紀代子

石垣を割る秋草の力かな
爽やかな声が研す彫塑館

金柑のたわわ芳し道灌碑
何も居ぬ大きな檻の落葉かな
落花生ぼつち肥沃の黒々と
空壇を仕分ける音や年の暮
自己流 楠原幹子

走り蕎麦講釈なんぞ無用なり
自己流を通して達者自然薯掘
草の実や一軒だけの書店消え
頑と言へる色なり吾亦紅
賜日和ヒマラヤ杉の鱗幹
朴落葉ことばに裏のあることも

命 綱 松井志津子

烏瓜命綱とはかく細き
蔵店に鬼おろし買ふ神の留守
神立つや一夜に満つる甕の水
この祠の神も旅にか風豊
間違へし路地行き止り式部の実
大噓視線矢となる法話中

詩 形 柴崎英子

築地塀ほろりと秋の日をこぼす
椿の実こつと胸打つ師の墓前
月見寺のかすれ碑文字に秋惜しむ
疎水いま静かにめぐり秋惜しむ
いのち育む土くろぐろと冬菜畑
いちまいの朴の落葉に受く詩形

日は高くあり 矢崎すみ子

照紅葉日は断崖に高くあり
折紙の折山水平線に秋
光りあることこそ秋の蛩かな
捨て鎌の錆に日互る櫓かな
鳥渡るアンモナイトの真の闇
樹の洞に童かくるる時雨かな

十三夜 鈴木良戈

京訛濃き若僧や十三夜
町住の窓に吊され干菜束

眠剤を数へ確かむ夜長かな
先生の句碑の息づく萩明り
雲割れて素早き朝日一の酉
花八つ手耳に残れる母の声

霜日和 大畑善昭

霜日和老いなど知らぬ拭き掃除
湯婆や夢でよかつたと夢に
桶の箍しつかり締めまり初氷
四五日は掃かずに銀杏落葉かな
通院の点滴の妻風邪流行る
すぐそばに八十路が立つてゐる冬ぞ

麻布十番 上谷昌憲

麻布十番本家と元祖走り蕎麦
蓮の実の飛んで上野の鐘が鳴る
皮のみとなり辛うじて木守柿
齒に衣を着せぬ男ととろろ汁
旬日を経たる訃報や紫苑咲く
明眸の齒科医に口を開けて冬

なつかしむ 浏览 千津

詠むといふ我との対話露月夜
雪便り和紙の柔さをなつかしむ
リハビリの数へ掛け声草もみぢ
読むより聴く老のならひや色葉ちる
霧ごめや老々自立の子との距離
残り菊わが名に変体仮名一字

影 絵 湯橋喜美

霜月やひそと産みある初卯
恍惚と手に初卯落葉どき
ケープルの斜度三十度木の葉舞ふ
連結に手旗の発止枯るる中
障子入れ影絵遊びの出来不出来
鍋一つ使ひ廻せり日短

紅葉越 酒本八重

校歌百年初雁城を雁渡る
紅葉越笛吹峠とは佳き名

その昔の武士街道枯れにけり
もつそりと蕎麦掻き食めり旧き店
身に入むや信濃のくにで飲むそば湯
雪のあと朴は艶持つ樹となれり

日暮鴟 羽根嘉津

働かぬてのひら乾く夜の秋思
晚稻刈る村に大きな月上る
籠り居のときを叱咤の日暮鴟
せせらぎの光はいのち秋彼岸
雨上がり櫂もみづる詣で径
ひとときの流れに舞ひて散る紅葉

初炬燵 池田崇

駄々つ児の如く根槽の積まれぬし
大根の小屋丸ごとに燻さるる
大根燻す煤の揺らぐは藻のやうに
新顔を一つ加へし茎の石
手袋を脱ぎ置いための魚籠を吊り
初炬燵先づ頬杖をついてみし

潮鳴集



大利根へ
福島 茂

谷中とはまるごと御廟秋日濃し
噴煙を寢息のやうに山眠る
大根引く火口のやうな穴残し
大利根へどずんと釣瓶落しかな
玉子焼好きで勤労感謝の日

方程式
荒木 澤子

割り箸のさくつと割れて文化の日
吾亦紅方程式の如く立つ
この星に七つの海や冬銀河
石段をことんことんと千歳飴
神渡しりバーシブルの裏を着る

記 憶
荒井千瑛子

鎮魂の八月万の記憶埋め
山茶花の散りしく早き日の早さ
折れ線の上がり下がりにある秋思
逃れざる死出の旅あり冬紅葉
百合鷗並びてあどけなき白さ

余 白
峰崎 成規

鴉啼くや余白に韻を生む詩歌
しをり紐あとがきに置き秋惜しむ
真実はアバウトの中海鼠食む
大望を空に余して黄落す
熱爛や一期へ繋ぐ一会あり

『長州砲』

(自選二十句)

能美昌二郎

三代の男ばかりの女正月
黙といふ諾もあるべし冴返る
三分は使へる時間大試験
雪吊の解かれて松の背伸びかな
紙風船大きく突けば高く飛ぶ
貝寄風や北前船の舳ひ石
父の日のナフキンふたつ予約席
このセルも帯も頑固な父ゆづり
初鯉海の蒼さを滴らす



日盛や長州砲のドンと鳴り
水打つて茶屋町夜へ動き出す
島国の中に島々鳥渡る
手の平で采の目となる新豆腐
逆らひも媚びもせず生き吾亦紅
冬うらら潜水艦の半身浴
聴くだけは聴くと端座の懐手
「歩」のやうに並び舟屋の時雨をり
鷹舞ふや沖に満珠と千珠島
対岸に和布刈神事の灯の揺らぐ
初寅や校歌の山に登りたる

年間二十句
(自選二十句)

本池美佐子

一陽来復宝石のごとジャムの瓶
木々を縫ふ霧ひたひたと獣めき
鈍色の雲透くほどに冬満月
風花や耳奥にある佳き言葉
啓蟄やペンと手帳と好奇心
花万朶四百年の矜恃かな
飛魚の目に残されし日本海
桜朶降るや大地の深呼吸
日照雨去り若葉の匂ひ日の匂ひ



遠き日を眺めてをりぬ首夏の海
公園は植物図鑑風薫る
溪流の白波涼し耳涼し
驚きの時空分け合ひ青蜥蜴
本箱は丸ごと自分史額の花
万物のふつと息吐く夏の果
一行の詩にある宇宙桐一葉
鳥渡る生くる力の翼もて
空蟬やいのちのままに脱がれゐて
風の色かすかに変はる花野かな
二歳児の自我にとんがり小鳥来る

沖作品



能村研三選

霧深きことのみ言ひて霧の原
サハリンを雲のごと見て秋惜しむ
秋霖や千代紙の店閉ぢられて
築地塀なほも乾かす秋日和
盆栽の紅葉の見頃見て行けと
地図一枚平らに置きて草紅葉
木の実落つ縄文人の貌となり
白鳥の意外や助走の慌てぶり
小春日のゆるりと廻る観覧車
鴉鳴いて景色わづかに軋みたり
鬼の子のふらり山頭火の句碑へ
崖少し崩れて烏瓜あまた
鴉高音ポットの茶葉のジャンピング
紙漉くや簾桁の波の躍り立ち
神無月紙漉のぴんと立ちにけり

千葉

竹内タカミ

坂本 徹

市川市

小林 陽子

鳥は枝に人はベンチに小鳥来る
前籠に風切る大根走りけり
退職しもの見えて来し三の酉
古自転車は身内勤労感謝の日
湯たんぽに在らねばならぬ肋骨
秋澄むや崇敬深き筑波山
賞外の鉢の込み合ふ菊花展
空打ちの鋏音軽き松手入
歳聞かれ干支を答ふる敬老日
藪からし絡み尽くして枯れにけり
ひげ根焼くちりりちりりととろろ汁
掃きぐせの残る帝や秋惜しむ
母の荷に隙間のなくて今年米
奔放に弾け椿の実の軽し
奥山の色さす風や野紺菊

東京

大網 健治

千葉

塩野谷慎吾

木村 美翠

沖作品 15句選評

*
能村研三

ハイキング程度の山登りの経験があるだけだが、よく国土地理院発行の二万五千分の一の地図を持っていった記憶がある。最近はもっと情報量の豊富な地図があるようだが、行先や方向が判らなくなった時は、心を冷静にしておもむろに地図を開いてみるのが良い。草紅葉の上に平らに置いてじっくりとこれからの行程を練った。

紙漉くや簾桁の波の躍り立ち 小林 陽子

先日、東京日本橋の小津和紙で紙漉きの体験吟行を行った。大都会のビルの中で紙漉きであったが、インストラクターの適切な指導で紙漉きを経験した。漉き槽の中で原料の繊維を均一にしながらか漉いて行く。簾桁の上で水が踊り、その音がとても心地よく感じた。下五の「躍り立ち」という妙を得た表現が成功した。

古自転車は身内勤労感謝の日 大網 健治

作者の謹厳実直ぶりが窺える句である。勤労感謝の日の定義は「勤労をたつとび、生産を祝い、国民がたがいに感謝しあう日」とのことだが、祝日名が長いので、この日を俳句に詠むのが難しい。自分の仕事を支えてくれた古自転車に感謝の意を捧げた。(以下略)

サハリンを雲のごと見て秋借しむ 竹内タカミ

日本の本土から国境の向こうに外国が見えるところは、北海道の宗谷岬だけである。私もかつてこの地に立つたことがあるが、視界が悪くサハリンを見ることは出来なかった。サハリンは南半分が四十年間日本の領土であったことから、ここから望むサハリンの島は単なる異国であるよりも、何か複雑な思いに駆られる。そんな思いが「雲のごと見て」という措辞につながった。

地図一枚平らに置いて草紅葉 坂本 徹

坂本さんはよく山登りをされるのであろう。私は学生の頃に